慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	形容詞的、又は副詞的な意味を含む連体修飾「A のB」について
Sub Title	A note on the adnominal modification of「A no B」in Japanese
Author	小屋, 逸樹(Koya, Itsuki)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2019
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.50 (2019. 3) ,p.285- 301
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000050-0285

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

形容詞的、又は副詞的な意味を含む 連体修飾「A の B」について

小　屋　逸　樹

日本語の連体修飾表現「A の B」では、A と B の双方が名詞句の場合のみならず、名詞句以外の A が体言 B と結びつき得ることも広く知られている。本稿では、head の B は当然ながら名詞句であるものの、A が名詞句かどうか判断しづらく、形容詞的、又は副詞的とも言える意味合いをもつ例を取り上げ、その用法を検証してみたい。「A の B」は「NP_1の NP_2」と言い替えてもよいが、NP_1の品詞上のステイタスが明確でないケースもあるため、以降は品詞に中立的なこの言い方を用いることにする。

格助詞「の」の広範な使用例をめぐっては、その多様な用法と意味を細かく列挙した国立国語研究所（1951:155ff.）をはじめ、連体化のプロセスをいくつかのタイプに分けて解説した寺村（1991:237ff.）や、「A の B」形式の用例を豊富に集め、辞典としてまとめた森田（2007）などの貴重な記述的研究がある。しかし、「A の B」の内部構造を意味論や語用論の知見に基づいて解明しようとした西山（2003）の理論的研究ほど包括的な論考はないのではないだろうか。一見して単純な形式の「A の B」だが、実に多様で幅広い表現例を有するため、さまざまな角度から多くの例を検証するのは容易な作業ではない。本稿では、基本的にデータを多く拾い上げる記述的なアプローチを用いて A が形容詞的、又は副詞的意味をもつと思われる例を見て行きたい。日本語の助詞「の」が介在する連体修飾表現は、英語の of やドイツ語の von によって結びつけられる表現例に比べても多岐にわたり、「風の便り」

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 50 号（2019）pp.285~301

や「左手のピアニスト」、「チキンのお客様」、「趣味の盆栽」、「太郎の裏切り者」など、その種類の豊富さを示す例は枚挙に暇がない。

以下では、西山（2003）の分類を基調に、まず形容詞的な意味をもつAを取り上げ、その「A の B」表現の可否と主な二つのタイプを見る。次ぎに、副詞的な意味をもつAの中で、特に時間表現を含む例を検証し、記述的な観点から「A の B」表現の多様さと現行の分類の是非について論じてみたい。

1. 形容詞的な A をもつ「A の B」

まず、「A の B」において、A が形容詞的な NP のケースを見てみよう。「形容詞的な NP」というのは漠然とした言い方ではあるが、“ 形容詞によっても表現可能な意味内容を表す NP” といった程度の大まかな意味で用いるものとする。何らかの性質や状態を述べる表現が多いので、A が形容詞的な NP というのは、一般にある種の属性を head NP に帰す連体修飾の用法であると言える。品詞上は NP でも形容詞的な意味をもつ表現は、例えば英語の a beauty が beautiful と近似の意味をもち、下のように、共にコピュラ文の述語として主語の属性を示すという現象などに見られる。

（1） a. She is a beauty/a wonder/a fool.
 b. She is beautiful/wonderful/foolish.

また、述語名詞句を「NP of NP」という連体修飾の形にして、主語の形容詞的な性質を属性として示すことができるのも周知の通りである。

（2） a. He is a man of ability/bravery/wisdom.
 b. It is a book of no use/no importance.

このように、ある種の名詞句が形容詞的な性質を表す例は日本語でも以下のような表現に見られる。

（3） a. サーフィンが楽しみだ。（楽しみのサーフィン / 楽しみなサーフィン）
b. 彼女は大人だ。（大人の女性 / 大人な女性）
c. 彼は阿呆だ。（阿呆の坂田 / 阿呆な男）

（3）は、「楽しみ」や「大人」、「阿呆」が名詞とも、また学校文法でいう形容動詞（日本語学や日本語教育ではしばしば「形容名詞」や「ナ形容詞」）とも見なせることを示したものである。「の」によって体言と結びつく名詞と、「な」によって結びつく形容動詞（「大人な女性」のような表現は近年よく見られる）の双方が可能なことがわかる。

このように、形容詞的な意味をもつ NP は、主格補語になった場合、形容（動）詞と類似の働きをもつと言えるだろう。それでは、このような「A の B」は、「NP_1の NP_2」を理論的にタイプ分けした西山（2003）ではどのように位置づけられているのであろうか。西山（2003:16ff.）の分類によると、以下に引用した「タイプ B」と呼ばれる性質を有するものがそれに相当する。（注1）

（4） 西山（2003:19ff.）における「NP_1の NP_2」の分類から
タイプ［B］：NP_1デアル NP_2
例：ピアニストの政治家　＜ピアニストデアル政治家＞
NP_1は叙述的な意味を表し、NP_2はその叙述があてはまる対象。
構造的には「NP_1デアル」という叙述を伴う連体修飾をなしている。「NP_1の」は、「関係節」としての連体修飾節であって、「x はピアニストである」の空所を主要語 NP_2が埋めるという関係が成立している。

西山（2003）の見解では、タイプ［B］は連体修飾節として、文的な内部構造が「NP_1の NP_2」に対して想定されていると言える。この場合の文的内部構造とは、明らかに「x はピアニストである」というコピュラ文を指していると考えられる。以下の議論では、上の（4）の規定を参照しながら、形容詞的な NP が A となる「A の B」の様々な例を見てみよう。

1.1. 2つのタイプ

まず、この種の連体修飾には、大きく分けて以下の2つのタイプがあるように思われる。

（5） a. 謎の死、悪の枢軸、最高のワイン、驚きの結果
　　 b. 苦難の道、夢の新薬、悲願の金メダル、楽しみの一戦

（5-a）のタイプから見ていこう。（5-a）における A は、いずれも「謎めいた」「邪悪な」「最も良い」「驚くべき」といった形容詞的意味を表し、このような性質を B の属性として述べたものと考えられる。品詞上は NP だとすると、ちょうど（2）で見た英語の「of NP」が形容詞的意味を表すのに相当する表現形式だと言えよう。このような連体修飾は、西山（2003）の見解（4）に従うと、「A の」の「の」を「デアル」とパラフレーズすることができる（これはさらに「ダッタ」や「デアッタ」と過去時制にすることも可能であろう）。A の位置に起こる NP は叙述名詞句で、よって、コピュラ文の述語名詞句として現れることもできる。属性を付与するタイプの連体修飾とコピュラ文は、「装定」と「述定」としても関連づけられるように、「述語名詞句-の-主語」という構成の連体修飾を形成し得るのである。この点に関して（5-a）の各表現を見てみると：

（6） a.「謎の死」: 謎デアル死 / 彼の死は謎だ。
　　 b.「悪の枢軸」: 悪デアル枢軸 / この枢軸は悪だ。
　　 c.「最高のワイン」: 最高デアルワイン / このワインは最高だ。
　　 d.「驚きの結果」: 驚きデアル結果 / この結果は驚きだ。

いずれの例でも、「の」を「デアル」と言い換えることができ、また「A の B」の B を主語としたコピュラ文も可能である。（6）で明らかなように、連体修飾内の「の」は基本的に英語の関係節内の be 動詞と類似の機能を担っており、内部には文的な構造が存在していることを示唆している。

しかしながら、このような連体修飾の A には、実は「デアル」への言い換えや、コピュラ文の述語名詞句への転換が困難、もしくは全く不可能と思われる例が存在することも事実である。まず、以下の表現を見てみよう。

（7） a.「類似の本」: ? 類似デアル本 / ? この本は類似だ。
b.「孤高の作家」: ? 孤高デアル作家 / ? この作家は孤高だ。
c.「初歩の中国語」: ? 初歩デアル中国語 / ? 春学期の中国語は初歩だ。
d.「幻の生ハム（= パルマ産 Culatello di Zibello）」: ? 幻デアル生ハム / ? この生ハムは幻だ。

上の例でも A は「よく似た」「超然とした」「初歩的な」「幻のような」といった性質 / 状態を表し、属性付与としての連体修飾を成しているが、「デアル」への言い換えや、コピュラ文の述語名詞句とすることには、許容度に個人差はあるものの、困難さが伴うであろう。さらに不可能とも思われる例には、以下のような表現がある。

（8） a.「世紀の発見」: * 世紀デアル発見 / * この発見は世紀だ。
b.「魔の交差点」: * 魔デアル交差点 / * この交差点は魔だ。
c.「天下の横綱」: * 天下デアル横綱 / * この横綱は天下だ。
d.「世界のミフネ（= 三船敏郎）」: * 世界デアルミフネ / * ミフネは世界だ。

（8）でも、A はそれぞれ「極めて稀な」「悪事の多い」「比類ない」「世界的（に有名）な」という性質 / 状態を B の属性として述べているが、（6）で見たような言い換えは不可能であると言っても良いだろう。この点については後ほど触れるが、少なくとも「デアル」へのパラフレーズやコピュラ文に置き換える可能性に関しては、均質的とは言えない例があることは事実である。このように、（5-a）の部類に入る A 表現は、必ずしも同様の振る舞いを示すわけではない。にもかかわらず、A として現れる NP はいずれも head NP である B の性質や状態を示している点で共通しており、また、それ以外の

役割は担っていないものと考えられる。

さて、それでは次のタイプ（5-b）を見てみよう。ここでも A が形容詞的な属性表現として B を連体修飾しているが、その属性表現は何らかの行為に対するコメントであり、B そのものに帰する性質を表したものではないという点が異なる。つまり、（5-b）の表現を解釈する際は、例えば以下の［　］内のようにある種の行為を補う必要がある。

（9） a.［歩むのが］苦難の道
　　b.［開発するのが］夢の新薬
　　c.［獲得するのが］悲願の金メダル
　　d.［見るのが］楽しみの一戦

つまり、A として言語化された属性表現は、B を目的語とする動詞句全体に対しての評価であって、head NP である B のみに帰されるものではない。英語学で知られる *tough* 構文的な用法であり、（9）の A はある種の行為に対する評価を示す形容詞的な NP である。ここでも、（4）の通り、「の」は「デアル」と置き換えることができ、またBを主語としたコピュラ文を作ることもできる。（注2）

（10） a.「苦難の道」: 苦難デアル道 / この道は苦難であった。
　　b.「夢の新薬」: 夢ダッタ新薬 / この新薬は夢だった。
　　c.「悲願の金メダル」: 悲願ダッタ金メダル / この金メダルは悲願だった。
　　d.「楽しみの一戦」: 楽しみデアル一戦 / この一戦は楽しみだ。

表現によっては過去時制の「ダッタ / デアッタ」の方が自然なものがあるが、いずれも基本的には（4）の特徴づけに沿ったものだと言っていいだろう。この種の評価表現では、関与する行為とそれに対するコメントの双方が A として複合的に明示される例もある。

（11）a.「楽勝の試験」：楽勝デアル試験 / この試験は楽勝だ。
b.「苦行の生涯」：苦行デアル生涯 / 彼の生涯は苦行だった。
c.「難攻不落の要塞」: 難攻不落デアル要塞 / この要塞は難攻不落であった。

漢語表現には複合的な意味を表すものが多いが、このような例は何も日本語に限ったことではない。ドイツ語にも schadenfroh（他人の不幸を喜ぶ）のような複合的意味をもつ形容詞があり、他の形容詞と全く同様に用いられる。

以上、形容詞的な意味をもつ「A の B」の2種類を概観したが、(7）や（8）に示したように、A が属性表現であるにも関わらず、「A の B」から「A デアル B」への言い替えや、「B は A だ」というコピュラ文に展開できないものがあるのは何故だろうか。それは、A が限定用法（attributive use）のみで使われるタイプの NP であるか、またはそれに近いものだからであろう。英語にも former や mere、only、entire などといった限定用法のみの形容詞が存在することが知られているが、(7）や（8）の A もそのような制限を有し、コピュラ文で述語名詞句になることができないものと推測される。属性を示す点では西山（2003）のタイプ B に分類される例ではあるが、限定用法のみで使われる表現が存在することは留意されなければならない。(4）の規定は、属性を付与する連体修飾表現には、関係節を内部構造に有するタイプばかりではなく、自動的にコピュラ文には置き換えられない例も存在する、と補足修正されなければならない。

2. 副詞的な A をもつ「A の B」

それでは、次に A が副詞的な意味合いをもつ例を見てみよう。「の」による連体修飾の構成のあり方を示した森田（2007:245f.）は、要素間の接続関係という観点から以下の例をあげて5種類に分類している。

（13）a.「体言＋の」：梅の花、私の写真、月の沙漠、川の流れ
b.「体言以外の語＋の」：普通の花、暫くの辛抱、例の件、大の男
c.「体言＋助詞＋の」：十本ほどの花、大学への道、国からの手紙

d.「用言＋助詞＋の」：見てからの話、完成するまでの苦心

e.「連体詞」：どの花、あの星

このうち、最初の2種類が「AのB」において助詞「の」を介してAが単独で体言に結びつく例である。(13-a) は名詞句による連体修飾であるが、(13-b) はAの位置に「体言以外の語」が現れるケースである。「体言以外の語」がどのような品詞を指すか森田は触れていないが、形容詞や形容動詞は「*美しいの花」や「*きれいの花」が示すように「の」を介しては体言と結びつかないので、恐らく副詞などの品詞を念頭に置いたものと思われる。よって、ここではAが副詞の場合を取り上げ、副詞的な意味をもつNPと比べてみたい。まず、(14) に見られるように、副詞には連体修飾が可能な場合とそうでない場合がある。

(14) a. 情態：よれよれのスーツ、ズブズブの関係、まもなくの開演

程度：かなりの雪、たっぷりの野菜、よほどの事情

陳述：さすがの対応、あいにくの天気、まさかの落選

b. 情態：*のんびりの生活、*せかせかの歩行、*きっぱりの否定

程度：*もっとの食事、*とてもの収穫、*すこぶるの面倒

陳述：*たぶんの昇進　*きっとの来日、*たとえの場合

一般に、副詞は「情態（様態）」、「程度」、「陳述」と大きく三つに分類されることが多いが、それぞれの分類において、「の」を介する連体修飾が可能な場合と不可能な場合があり、その理由は定かではない。また、「のろのろの運転」や「わずかの望み」、「すぐの出発」といった表現に関しては、許容度に個人差があるように思われる。本節では、広範にわたる副詞的な連体修飾全体の可否を検討する余裕はないので、そのごく一部である時間にまつわる副詞的な表現に絞って、「NP_1のNP_2」と判定できるものがあるのかどうか、またその場合はどのような意味をもつのか、といった点を中心に議論し

てみたい。

連体修飾を形成する（14-a）の副詞は、「彼のスーツはよれよれだ」や「彼女の対応はさすがである」のように述語になれるものが多い。「デアル」を伴って述語になることは、形容(動)詞と同様に副詞も表現によってはコピュラ文の主格補語として機能しうるということで、この点では英語の副詞とは異なっていると言えよう。格助詞「が」や「を」を直接伴って、「* すぐが /* すぐを」「* さすがが /* さすがを」などと構文上は名詞のように振る舞うことができないのも、形容(動)詞との共通点と言える。しかし、時に副詞か名詞かの判断がしづらい場合があり、例えば、国語辞典によって(e.g. 小学館『大辞泉』)、名詞と副詞の両方として分類されている「いつも」が「いつもの食事」のように用いられた時、これは A を名詞と見なすのか、あるいは副詞と考えるのかという問題が起こる。そこで、「いつも」の名詞性をチェックする必要が生まれるが、日本語にはヨーロッパ諸言語に見られる文法的「性」や「数」といった概念を手がかりに名詞を判定できない。恐らく、格助詞が直接付いて文の主語や目的語として機能する要素、といった点に基づいて名詞性をチェックすることになるだろう。そこで、「いつも」を対象に以下のような文を作ると、個人差はあるものの、筆者の周りのインフォーマント（同僚数名と学生約20名）のほとんどが（15）は不自然であると判断した。

(15) a. ? いつもが大切だ。
　　b. ? いつもを楽しむ。

構文上、上のような環境に現れることができない「いつも」は名詞と見なす訳には行かないという判定である（ちなみに、『大辞泉』の名詞としての例は「いつものとおり」)。しかしながら、意味的に似た表現を並べてみると、中には名詞と判定できるものがあるようである（以降、日本語の判定は同じインフォーマントによる)。

(16) a. 例：「毎日の食事」「日々の食事」「日頃の食事」「ふだんの食事」における A

－{ 毎日 / 日々 / （?）日頃 / ? ふだん } が楽しい。

－{ 毎日 / 日々 / （?）日頃 / ? ふだん } を楽しむ。

b. 例：「四季折々の食事」「季節毎の食事」における A

－{ 四季折々 / ? 季節毎 } が美しい。

－{ 四季折々 / ? 季節毎 } を楽しむ。

（16-a）では「ふだん」と恐らく「日頃」を除いた他の表現はおおむね名詞性が高く、また（16-b）では「四季折々」の方が「季節毎」に比べて名詞性が高いという結果を得た。このように、名詞か副詞かの判断は必ずしも容易ではない。さらに、「時間を表す A」という点で類似のものであっても、その表現間には同様のバラツキが見られる。次の例を比べてみよう。

(17) a.「今の鎌倉」：今が大切だ。/ 今を考える。

b.「今日の鎌倉」：今日が大切だ。/ 今日を考える。

c.「現在の鎌倉」：(?) 現在が大切だ。/ 現在を考える。

d.「最近の鎌倉」：* 最近が大切だ。/ ?? 最近を考える。

「今」と「今日」に比べて「現在」は「が」を付けて文の主語とした場合にやや許容度が落ちるが、「最近」は主語としても目的語としても不自然なようだ。ただ、格助詞が名詞を直接マークするという一般的な性質から見直すと、「現在」や「最近」も、「現在と / へ / より / から / まで」、「最近より / まで」のように、複数個の格助詞と直接結びつくので、名詞と同じ環境に起こることもある。この辺りは判断が難しいので、別の観点から名詞性を検討してみることにしよう。

興味深いことに、「NP_1の NP_2」の中には（意味内容に多少の影響は出るが）その語順を入れ替えても成立する以下のような表現があり、NP_1が連体

修飾の主要語である head NP として機能しうる要素であることが示されている。

（18）a. 4月3日の誕生日 / 誕生日の4月3日
b. 英語の達人 / 達人の英語
c. 盆栽の楽しみ / 楽しみの盆栽
d. 嘘つきの太郎 / 太郎の嘘つき
e. 王将の餃子 / 餃子の王将

そこで、（17）の表現に関して、A と B を入れ替えて連体修飾の主要語になれるか試してみよう。

（19）a. 鎌倉の今
b. 鎌倉の今日
c. 鎌倉の現在
d. * 鎌倉の最近

連体修飾において A が修飾される側の主要語になるということは、名詞として機能していることを示す証左と言えるだろう。（19-b）では「今日」を「コンニチ」と音読みすると自然さが増すようである。音読みすると、「本日」のみならず「現在」まで意味が広げられるためであろうか。ただし、時間幅があっても（19-d）の「最近」はここでも許容されず、他の3表現との違いを示している。このような観察に基づくと、A の位置に起こる「今」「今日」「現在」は名詞であると判断しても良さそうである。（注3）

2.1. 西山（2003）のタイプ C との関連

さて、それでは、A が時間表現の場合の「A の B」はどのような性質をもつのであろうか。時点を含む連体修飾に関しては、西山（2003）の分類でタイプ C と呼ばれるものがある。

(20) 西山（2003:31ff.）における「NP_1の NP_2」の分類から……

タイプ［C］：時間領域 NP_1における、NP_2の指示対象の断片の固定

例：a. 東京オリンピック当時の君

b. 着物を着た時の洋子

c. 大正末期の東京

d. 仕事に没頭しているときのあいつ

NP_1が特定の時間領域を表し、NP_2の指示対象をその領域のなかで固定する。NP_2は、（中略）聞き手がその対象を固定できる「定指示の名詞句」である。（中略）NP_1は NP_2にたいしてある限定を与えているという意味ではむしろ制限的な修飾語なのである。

西山の例の一つ「大正末期の東京」は、（17）と基本的には同じであろう。唯一の違いは（17）には直示的な表現が A として現れていることだが、「今の」や「今日の」が“制限的な修飾語”であることは確かであろう。NP_1は、さまざまな時間と共起する NP_2の一面を固定するために用いられている表現なので、「大正末期の東京」が「高度成長期の東京」や「バブル期の東京」と比して異なる表象となるように、「今の鎌倉」が「昔の鎌倉」や「将来の鎌倉」と比べて異なる表象に言及するという点で、「今の」は“制限的な修飾語”となっている。よって、（17a ～ c）はタイプ C と分類して差し支えないと思われる。しかし、西山がなぜ「時間領域 NP_1における、NP_2の指示対象の断片の固定」という用法を特別に認め、「NP_1の NP_2」表現の全体における一つの独立したタイプと見なしたのか、その理由は明らかではない。時間表現を含んだ「NP_1の NP_2」には、以下の例が示すように様々なものがあり、その中においてタイプ C が何か際立った意味的性質を反映したものであるとは考えにくい。

(21) a. 3時の電車

b. 3時の約束

c. 3時のおやつ

d. 3時の天気

（21-a）は、「3時に出発する電車」や「3時に到着する電車」等の解釈が可能で、語用論的な要因によって解釈が左右される。また、この表現は特定の電車の3時における姿を切り取って描写したものではない。西山のタイプCには語用論は関与せず、（21-a）はむしろタイプAに分類されるべき例と考える。同様に、（21-b）も、「約束は（時間が）3時だ」というウナギ文的な解釈の他に、「3時に交わした約束」などの解釈が可能で、ここにも語用論が介入する余地があると言える。「3時のおやつ」の「おやつ」は、「八つ時（やつどき）」に食べたことに由来する表現なので、（21-c）には時間表現が二つ連続することになる。菓子類を間食の対象とした場合、これらの食べ物は指示対象をもつものの、「おやつ」自身には指示対象がないことから、これをタイプCとは見なせない。また「xのおやつ」というようにパラメータを必要とする訳でもないので、タイプDでもなく、分類に窮する例である。ただし、語源的には「（現在の）3時であるおやつ（八つ時）」とタイプBであろう。そして、恐らく（21-d）のみがタイプCの候補となる例である。「3時という時点で切り取った天気」は確かに想定可能であり、語用論も関与しないと思われる。「天気」は大気の総合的な状態を意味するため、「日の出の太陽」や「十五夜の月」のように対象を直接指示できないが、天気を「空もよう」と解せばタイプCとして分類できる。このように、Aが時点を示す場合は、表現によって多種多様な意味関係が認められるのが通常である。先に見たAがNPと思われる（16）の例（「毎日の食事」や「四季折々の食事」）はさしずめタイプA、（17）はタイプCということになるであろうか。

さて、時間表現に関連して、西山（2013:150）は、「あの頃のアイドル歌手」という表現をめぐり、その構成が「副詞−の−名詞」であるとの主張を展開した。表面的には「NP_1のNP_2」であるものの、以下のような意味的な関係をもつものと想定されたのである。

（22）a. あの頃のアイドル歌手

b. あの頃　アイドル歌手であるひと

（22-a）は（22-b）に示されたように、「あの頃」が「である」にかかる副詞的限定であると見なされる。西山の議論は、「アイドル歌手」が非飽和名詞ではなく、「あの頃」はそのパラメータではないことを論証するためであったが、タイプCとも関連するので、ここで取り上げておきたい。（22）の分析によって、タイプCそのものの必要性が左右される可能性があるからである。そこで、（22）の妥当性について考えてみよう。すでに（14-a）で見た通り、副詞の中には確かに直接「の」を介して名詞句と結びつくものがある。ただ、「あの頃のアイドル歌手」という表現の「あの頃」が副詞であると一義的に断定するには少なからず問題がある。と言うのは、「あの頃」自体は名詞としても機能するからである。

（23）a. あの頃が楽しかった。

b. あの頃を思い出す。

c. アイドル歌手のあの頃

「あの頃」は格助詞を直接伴って主語や目的語になることができ、また表現の意味に影響は出るものの連体修飾の主要語にもなりうる。このような特徴は、例えば（14-a）であげた例では一般には見られないものである。[注4]

（24）「さすがの対応」

a. * さすがが・・・

b. * さすがを・・・

c. * 対応のさすが

（22-b）にあるように、「あの頃」は連体修飾節という文の形式に書き換えた場合、確かに時間を表す副詞として機能していると思われる。しかし、

「あの頃のアイドル歌手」という句レベルの表現においても副詞として機能しているかは定かではない。(23) が示すように、「あの頃」が名詞となりうる以上、「の」を介した連体修飾内の「あの頃」が名詞ではないことを示すには別の検証が必要であろう。さらに、(22) の分析のもう一つの難点は、類似の表現において、その全てが (22-b) と同様の連体修飾節を設定できないことにある。次の例を見てみよう。

(25) a. あの頃の日本　(? あの頃 日本であるもの)
　　b. あの頃の京都仏教界　(? あの頃 京都仏教界であるもの)
　　c. 昭和のアイドル歌手 (* 昭和 アイドル歌手であるひと)

「あの頃の日本」では、連体修飾節内が「あの頃、日本である」という理解しづらい意味内容になってしまう。少し具体化した「あの頃、京都仏教界である」でも同様である。節内がメタ的な表現形式であったとしても、「日本」や「京都仏教界」が述語名詞句として主要語「もの」を修飾する関係が明瞭ではない。さらに、「昭和、アイドル歌手であるひと」では、連体修飾節の中で「昭和」が副詞として機能しないので、これは名詞であろうということになる。すると、A が (時点を示す) 名詞であっても「アイドル歌手」と共起できるということになる。このように、連体修飾節に書き換えると、A を何らかの動詞にかかる副詞とするには無理が生じるケースがあるが、ひとたび「A の B」形式にすると、(25) は全て自然な表現として許容できるのである。つまり、時点の A を含む「A の B」は必ずしも連体修飾節と一対一で対応しておらず、A も節内で常に副詞として機能するとは限らない。文レベルで副詞にならない場合、「A の B」において A を副詞と見なす根拠は失われてしまうのである。

以上、特に A が時点を示す「A の B」を、A の名詞性を検証するテストと西山 (2003) のタイプ C との関連で観察してみた。妥当性に疑問が残る (22) の分析法は、タイプ C に対する代案にはならないと思われるが、タイプ C の存立理由はそもそも何なのかという議論は別途必要であろう。「の」を介

する連体修飾では、A が副詞なのか名詞なのかの見分けが困難なことが多く、インフォーマントの判断も常に一様とは言えない。現段階では、以下のような点を今後の課題として最後に指摘しておきたい。

(26) a. 連体修飾「A の B」を可能にする副詞とそうでない副詞の違いは単に使用習慣上のものかどうか。

b.「これから」や「これまで」は「これ」と「から / まで」を合成させた表現と考えられるが、直後に格助詞を伴って主語や目的語になることができる。また「日本のこれから / これまで」のように主要語になることもできる。両表現をすでに名詞化されたものと見なすことに問題はないか。

c. 西山（2003）で提唱されたタイプ C は時間表現に特化した特徴づけをもつが、タイプとして設けるための存立理由は十分と言えるか。

注

1. 「NP_1の NP_2」表現に関する西山（2003:16）の分類をあげておく。その後、この分類は拡大されているが、以下の部分は今なお維持されている。

タイプ［A］：NP_1と関係 R を有する NP_2

例：洋子の首飾り、北海道の俳優、隣の部屋の音

タイプ［B］：NP_1デアル NP_2

例：コレラ患者の大学生、ピアニストの政治家、北海道出身の俳優

タイプ［C］：時間領域 NP_1における、NP_2の指示対象の断片の固定

例：東京オリンピック当時の君、着物を着た時の洋子、大正末期の東京

タイプ［D］：非飽和名詞（句）NP_2とパラメータの値 NP_1

例：この芝居の主役、太郎の上司、この大学の創立者

タイプ［E］：行為名詞（句）NP_2と項 NP_1

例：物理学の研究、この町の破壊、パスポートの紛失

2. 次の例は小屋（2016:187）からであるが、それぞれの連体修飾表現「NP_1の NP_2」における NP_1は、コピュラ文が措定文、同定文、ウナギ文の違いに関わらず、その述語名詞句と対応している。

（a）イタリア人の学生 / あの学生はイタリア人だ。
（b）第29代内閣総理大臣の犬飼毅 / 犬飼毅は第29代内閣総理大臣だ。
（c）日比谷線の私 / 私は日比谷線だ。

3. 注意したいのは、A が B の位置に入れ替わった時、それは A が head NP としても機能しうるということで、入れ替わり自体が不自然な場合は、A の名詞性云々とは異なる要因が作用していると考えられる。例えば、名詞表現であっても入れ替えた結果 head NP になれない例も多く存在する。

（a）9月10日の東京 / * 東京の9月10日（cf. 今の東京 / 東京の今）
（b）3時の電車 / * 電車の3時（cf. 3時の到着 / 到着の3時）
（c）春の天候 / * 天候の春（cf. 春の入学式 / 入学式の春）

また、今まで見たテストを適用すると、「これから」や「これまで」といった表現も名詞としてのステイタスを有するのではないかと思わせる事例がある。

（d）「これからの日本」: これからが大事だ。これからを占う。「日本のこれから」
（e）「これまでの日本」: これまでが問題だった。これまでを検証する。「日本のこれまで」

4. 例外的にこのテストに対応する表現が「まさか」かも知れない。「まさかが本当に」「まさかを想定して」「落選のまさか」などは許容される可能性がある。

参考文献

国立国語研究所（1951）:『現代語の助詞・助動詞』、東京：秀英出版
小屋逸樹（2016）:「《NP_1デアル NP_2》の解釈をめぐって」、『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』47: pp.185-199
松村明（監修）（1998）:『大辞泉　増補・新装版』、東京：小学館
森田良行（2007）:『助詞・助動詞の辞典』、東京：東京堂出版
————（2008）:『動詞・形容詞・副詞の事典』、東京：東京堂出版
中山緑朗（他）（編）（2009）:『みんなの日本語事典』、東京：明治書院
西川賢哉（2013）:「二重コピュラ文としての「A は B が C(だ)」構文」西山佑司（編）『名詞句の世界』（pp.167-211）、東京：ひつじ書房
西山佑司（2003）:『日本語名詞句の意味論と語用論』、東京：ひつじ書房
————（2013）:「「あの頃のアイドル歌手」について」西山佑司（編）『名詞句の世界』（pp.141-155）、東京：ひつじ書房
寺村秀夫（1991）:『日本語のシンタクスと意味　第Ⅲ巻』、東京：くろしお出版